

アジア諸国における文化財保存の現状 —アンケート調査の結果と考察—

西浦 忠輝・二神 葉子*

はじめに

アジアには、長い歴史の中で生み出され、今日まで伝えられてきた多くの文化財が存在する。これらは、その文化財が存在する国で栄えた文化の証であるとともに、人類共通の遺産でもある。特に有名な文化財については、国際的な協力関係のもとに保存・修復が行われており、近年それらの活動が多くの人々の注目を集めている。しかし、アジアのそれぞれの国における文化財保存に関する現状は、あまり知られていないようである。

さて、東京国立文化財研究所は、文化庁や奈良国立文化財研究所との共催、関係諸機関の協力により、1990年以降、年1回、アジア文化財保存セミナーを開催している。本セミナーは、アジア諸国の専門家が文化財保存に関する基礎的情報を交換し、多国間の共同研究事業を推進するための基礎を築くことを目的とするもので、過去4回のセミナーのテーマは、第1回「石造文化財の保存における問題点」、第2回「博物館資料の保存」、第3回「木造文化財の保存と国際協力」、第4回「文化財の保存における伝統的な材料と技術」である。

東京国立文化財研究所では、各回のアジア文化財保存セミナーにおけるカントリーレポート報告者に対して、アジア諸国における文化財保存の現状に関するアンケート調査を行った（報文末参照）。本報は、本アンケート調査結果を整理し考察したものである。アンケートは各国を代表して参加した専門家に対して行ったものであり、その回答内容の信頼度は高いといえよう。なお、今回まとめたのは第3回セミナーまでの参加者の回答である。

1. アンケート回答者の専門と職責

回答者リスト（表-1）は、国名、氏名、生年、役職、専門、職責の順に記載されている。

第1回セミナーにおけるアンケートの回答者は1950年代生まれ（年齢30代～40代前半）が最も多く7名、30、40、60年代生まれは各1名ずつである。専門分野は保存、建築、歴史、考古が主である。比較的高い地位にいる参加者が多いためか、職責は管理的な部分も多く、インドやスリランカの回答者のように、扱う文化財の種類が限定されていたり、特定の方法の保存処理を分担している場合もあるが、必ずしも専門の枠内に留まらない。なお、インドのKamal K. Jain氏は、セミナーには出席していないが、カントリーレポートの共著者としてアンケートに回答したものと思われる。

第2回セミナーのアンケート回答者は1930年代生まれ（50代前半）が4名、40年代生まれが3名、60年代生まれが1名であり、セミナーのテーマを反映して博物館長が多いためか、前回よりも高い年齢の回答者が多い。専門は保存、化学などであるが、管理・指導的な立場で業務の運営に携わっており、やはり専門分野だけに留まらない職責を負っている。

第3回セミナーの回答者は4名と少ないため、セミナー参加者全体の傾向を示しているとはいえないが、内訳は1930年代生まれが2名、40年代、50年代生まれがそれぞれ1名である。

表-1 回答者リスト

【第1回セミナー】

インド	Kamal K.Jain 1954年 国立文化財保存研究所石材・建築材料部長 <u>石材・建築材料に関する研究、石材・建築材料の保存、環境計測</u> 部の研究事業・保存事業の計画・実施、研究所の研修コースでの講義 文化財・博物館収蔵品の保存状態の調査
インドネシア	Hubertus Sadirin 1951年 歴史考古遺産保護部研究課長 <u>文化財保存</u> 文化財保存に関する研究、保存事業の監督、保存技術の開発
韓国	金奉建 1956年 国立文化財研究所室長 <u>韓国伝統建築史</u> 伝統建築の調査、建造物復元のためのデザイン、保存のコンサルタント
スリランカ	Nanda A.Wickramasinghe 1956年 考古局長補佐 <u>壁画・工芸品・石製記念物の化学的保存</u> 記念物・館蔵品・出土工芸品の化学的保存、化学的保存に関する研修 考古局化学保存部の管理・運営
タイ	Borvornvate Rungrujee 1955年 芸術局第6分室 <u>歴史考古学、特に歴史的遺産の管理（古建築の発掘・修復、景観管理）</u> 古建築の保存・保護・修復の責任
中国	賈瑞広 1934年 文物研究所石窟保護研究室付主任 <u>中国石窟寺院の修復・保存技術</u> 石造文化財保存の研究における研究員の統率
ネパール	Shaphalya Amatya 1943年 考古局長代理 <u>ネパールの文化・歴史・美術・建築の研究</u> 文化政策の計画・実施、文化財の管理・保存 考古学的調査・発掘・保存の運営・管理 博物館・図書館・古文書館・歴史的宮殿の管理
フィリピン	Lorelei D.D.Castillo 1960年 国立歴史研究所建造物修復部研究員 <u>建築学、建造物修復</u> 歴史的建造物・遺跡の調査・研究、遺跡・建造物の保存の計画・実施
マレーシア	Adi Haji Taha 1951年 博物館局研究部長 <u>先史考古学</u> 考古学的研究、歴史的記念物・遺跡の保存、文化行政に関わる業務
ラオス	Thongsa Sayavongkhamdy 1954年 情報文化省博物館考古局長 <u>考古学、建築学、博物館学</u> 考古学的調査、文化財の管理・保護、歴史的建造物の調査・保存 博物館事業の企画・発展

【第2回セミナー】

インドネシア	V.J.Herman 1941年 西ヌサ・テンガラ地方博物館長 <u>絵画</u>
スリランカ	W.Thelma T.P.Gunawardena 1934年 国立博物館長 <u>保存、民族学</u> 博物館の管理、博物館学・保存・民族学のスタッフの指導
タイ	Kulpanthada Janposri 1937年 芸術局国立博物館部保存課長 <u>考古遺物・伝統絵画の保存、石材の科学的研究、絵画材料の分析、古代青銅の研究</u> 保存事業の運営、美術品・考古遺物の保存処理に関する研究
中国	陳元生 1935年 上海博物館文物保護研究部生物化学研究室長 <u>紙・墨の保存</u>
ネパール	Krishna Prasad Shrestha 1934年 国立美術館長 美術品の収集・保存、地方博物館の設立、文化的行事の企画、実施
バングラデシュ	S.A.M.Monowar Jahan 1948年 国立博物館保存管理官 <u>化学、博物館収蔵品・考古遺物の物理化学的調査</u> 博物館収蔵品の適切な保存、保存研究所で保存処理した文化財の記録作成、研究業務の監督 保存従事者のためのワークショップ・セミナー・研修プログラム運営
フィリピン	Emelita V.Almosara 1948年 国立歴史研究所記念物・紋章部長 歴史文化遺産への認識促進、保存事業のコンサルタント 記念物の保存、史跡・歴史的建造物の管理 フィリピンの文化財の保存促進のための事業計画に対する援助 文化財保護に関する政策決定・ガイドライン策定
モルジブ	Abdul Sameeu Hassan 1961年 国立言語歴史研究センター所長付 所長の補佐 研究所による文化・歴史事業および国際的研究事業の調整・評価

【第3回セミナー】

韓国	姜大一 1957年 文化財管理局文化財研究所常任専門委員 <u>出土金属遺物の保存・修復</u> 文化財の材質・保存環境研究
カンボジア	Sik Bun Hok 1946年 プノンペン芸術大学副学長 <u>法学</u> 教授（文学）、高等学校長
中国	孔祥珍 1932年 文物研究所高級技師 中国の木造建造物の保存・研究

フィリピン	S.D.Quiason 1930年 国立歴史研究所長、国立文化芸術委員会委員長 <u>歴史学</u> フィリピンの文化・歴史に関する研究事業の指揮、書物の出版 建築の保存・修復の監督
-------	--

2. アンケート回答者の所属機関の組織、職員数、業務内容

アンケート回答者の所属機関の組織、職員数、業務内容等をまとめて表-2に示す。同一の機関から参加している場合、後の回の記述を省略した。

表-2 アンケート回答者の所属機関の組織、職員、業務内容

【第1回セミナー】

国名	所属機関名	管轄官庁等	人数	部署	主要業務
インド	国立文化財保存研究所	インド政府文化局	約100	石材・建築材料部、紙部、生物劣化部、分析部、研修部、写真部、保存研究所分室	文化財保存、関連の研究 保存従事者への研修 知識の普及、博物館・文化関連組織への助言
インドネシア	歴史・考古遺産保護部	教育文化省文化庁		保存分局 -研究室部門 分析研究室 保存研究室 -保存部門 -景観・建築部門 保護分局、修復分局、 記録・出版分局	
韓国	国立文化財研究所	文化部文化財管理局		考古研究部、美術・工芸部、芸術・民芸部、保存科学部 -慶州文化財研究所 -扶餘文化財研究所 -長原文化財研究所 木浦海中遺物保存研究所	
スリランカ	考古局			地方分室 調査、博物館 建築、管理 調査・記録部 保存部(建築学的) 保存部(化学的) 金石部 管理部、施設部、執行部	
タイ	芸術局第6分室			研究人員部、保存部、総務部、経理部、施設部	

中国	文物研究所		100余	古建築保護研究室 石窟保護研究室 館蔵文物研究室 材料測定試験研究室 古典文献研究室 文物考古研究室 科学技術情報研究室 図書資料室、学術研究委員会、総務室	国家级の重要な文化財の研究、保護技術の研究
ネパール	考古局	教育文化省	103		文化政策の計画・実施 文化財調査・管理・保存 博物館・図書館・文書館・歴史的宮殿の管理 ネパールの歴史・文化・芸術・建築等の研究
フィリピン	国立歴史研究所	(政府の文化機関)		研究・出版部、歴史教育部、記念物、紋章部、建造物保存部	研究・出版、歴史教育、紋章作成、文化的記念物・建造物保存
ネパール	博物館局	文化芸術観光省	250	執行部 研究部 歴史学、民族学 自然誌 古代部 記念物、考古学 保存 展示・教育部	
ラオス	博物館・考古局	情報文化省	9		博物館の発展、考古学・建築学的研究、文化財の保存

【第2回セミナー】

国名	所属機関名	管轄官庁等	人数	部署	主要業務
インドネシア	西ヌリ・テンガラ博物館	教育文化省		収集部門、保存研究室 準備・調整・研究部 文化教育	
タイ	国立博物館保存課	教育省、芸術局		国立博物館部 保存課	有機物、無機物、絵画・美術品保存
中国	上海博物館文物保護研究部		12 (研究に 関わる)	中国書画の保存 青銅製品の防鏽 漆器、木製品の保護 熱ルミネセンス年代測定 青銅の鋳造技術 軟X線 中国古陶器の分析	
ネパール	国立美術館	(政府が運営)			

バングラデシュ	国立博物館 保存研究部		12		個人所有の文化財、館 蔵品の適切な保存 博物館環境調整、害虫 防除 定期的な収蔵品の立入 検査 研究、分析
モルジブ	国立言語歴史 研究センター				

【第3回セミナー】

国名	所属機関名	管轄官庁等	人数	部署	主要業務
韓国	国立文化財研 究所	文化部 文化財管理局		保存科学研究室 物理・金属実験室 化学・木材実験室 生物・紙類実験室 分析室 庶務	
カンボジア	記載なし				

3. 文化財の保存に関わる国の機関

表-3に文化財の保存に関わる国の機関をまとめる。文化財の保存を行う国の機関として、政府の機関、国立の文化財（保存）研究所、博物館、美術館、文書館などの保存部門が挙げられている。これら以外に、韓国、バングラデシュでは大学の博物館が文化財の保存に関わっているとされている。しかし、それ以外の国では国立大学が文化財の保存に関わる例はあげられておらず、また〈6. 保存技術者の研修方法〉を見ても、大学が文化財の保存にあたる人材の養成機関であることはあまりない。多くの国では、大学が文化財保護に果たす役割は、現在のところそれほど大きくないといえよう。

タイでは、保存を行う対象とされる文化財の種類によって保存を行う機関が異なっていることがわかる。このように分業が行われていることが明確に述べられている場合もある。しかし機関の名称のみの記述の場合、古文書館のような場所ではおそらく文書類の保存を行うと思われる、というように、機関の名称から扱うものがおよそ類推できる場合もあるが、各機関内の部署レベルでの分業も考えられる上、必ずしも回答の形式が一定しないので、状況を単純に比較することはできない。

表-3 文化財の保存に関わる国の機関

インド	・国立文化財保存研究所 ・インド考古調査局 ・国立博物館中央研究室 この他、中央、州の博物館、州の考古局が保存業務に従事
インドネシア	・歴史・考古遺産保護推進局 ・博物館局 ・国立古文書館 ・国立図書館 この他、中央政府、地方の行政機関、特に文化局が文化財保存を実施
韓国	・文化財管理局 ・国立文化財研究所

韓国(続き)	<ul style="list-style-type: none"> ・国立博物館 国立中央博物館、慶州国立博物館、光州国立博物館、全州国立博物館、晋州国立博物館、扶餘国立博物館、公州国立博物館、国立民俗博物館 ・国立現代美術館 ・大学 啓明大学校博物館、慶北大学校博物館、東亞大学校博物館、慶尚大学校博物館、釜山大学校博物館 ・陸軍博物館
カンボジア	<ul style="list-style-type: none"> ・美術大学 保存部(国立美術館およびアンコール保存部) ・演劇芸術保存部
スリランカ	<ul style="list-style-type: none"> ・考古局 国立博物館 国立古文書館 中央文化基金
タイ	<ul style="list-style-type: none"> ・国家文化委員会 文化センター 国家環境委員会 ・国家象徴 首相官邸委員会 ・教育省芸術局 国立博物館部保存課:文化財の科学的保存 考古部:絵画の保存 現在使われていないモニュメントの修復 建築部:現在使用されているモニュメントの修復 国立古文書部、国立図書館部:古文書、古書の修復を行なう小規模な作業室
中国	<ul style="list-style-type: none"> ・中国文物研究所 上海博物館保存・考古研究室 ・中国歴史博物館保存研究室 敦煌研究院保存研究所
ネパール	<ul style="list-style-type: none"> ・考古局 グティ・トラスト 国立文化財保存研究所
バングラデシュ	<ul style="list-style-type: none"> ・バングラデシュ人民共和国考古局 ・ラジシャヒ大学ヴァレンドラ研究博物館 民芸財団 ダッカ大学
フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・国立歴史研究所:歴史的建造物の違法な改造、解体を禁止する権限 ・国立博物館:特に重要な遺跡の保存、修復 ・歴史・文化保存ナショナルトラスト ・国立古文書館記録処理・古文書部:古文書の保護、維持管理 ・国立図書館:原本や重要文書の保管、蔵書の保存 ・フィリピン文化センター:芸術の振興、保護 ・文化・芸術諮問機関 ・観光部:歴史的地域、記念物の観光開発に関する政策策定 ・イントラミュロス部:マニラの古い町並イントラミュロス管理 ・公共事業・高速道路公団建造物部:記念物の保存・修復の技術監督
マレーシア	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館局〈クアラルンプール〉 国立古文書館〈クアラルンプール〉 ・サバ州博物館〈コタキナバル〉 サラワク州博物館〈クチン〉
モルジブ	<ul style="list-style-type: none"> ・国立言語歴史研究センター
ラオス	<ul style="list-style-type: none"> ・地方政府、社会科学委員会、国立博物館のそれぞれの文化財部門

4. 国立以外の文化財保存に携わる機関（私立、国際機関など）

国立以外の国内の機関は、インド、フィリピンでのナショナルトラスト、ネパールの開発トラストなどが挙げられているが、まだそれほど多くはなく、国立以外の機関が文化財の保存に携わることがない国もある。韓国の湖巖美術館は、企業集団である現代グループの博物館である。日本には企業が所有、助成している美術館は数多くあるが、それ以外の国では、企業のイメージアップのために投資する余裕がないためか、私企業が自国の文化財の保存に関わることはまだ少ないようである。経済発展に伴い、今後増加する可能性はあろう。

国際的な機関としては、ICOM、ICOMOS、SPAFA、UNESCO などが挙げられている。また、特定の国に属する機関で挙げられているのは、ISMEO、フランス極東学院などいずれも欧米の機関である。アンケート回答者が、自国に出先機関を設置し、常駐して文化財の保存を行っている機関のみを回答した可能性はあるものの、アジア諸国間での協力関係、とりわけアジア諸国の文化財保存に対する日本の貢献は、アンケートの回答を見る限り、依然として不十分であるといえるのではないだろうか。

表－4 国立以外の文化財保存に携わる機関

インド	・ インド芸術文化財ナショナルトラスト ・ 文化財トラスト
インドネシア	・ 文化財保存グループ ・ UNESCO：ボロブドゥル寺院の修復の援助 歴史記念物、遺跡の保存、博物館収蔵品の研修講座の援助 ・ Japan Cultural Grant ジャカルタ国立博物館の名品コレクションへ警報 システムの援助
韓国	国際機関 ・ ICOM 韓国支局 ・ UNESCO 韓国支局 私立機関 ・ 湖巖美術館
カンボジア	・ UNESCO
タイ	・ SPAFA ・ UNESCO ・ ASEAN DEPARTMENT ・ ICOMOS ・ フランス極東学院
ネパール	・ ルンビニ開発トラスト（半官） ・ パスピティ地域開発トラスト（半官） ・ ISMEO（イタリア） ・ カトマンズ渓谷保存トラスト（アメリカ） ・ ネパール文化財協会（NGO）
フィリピン	・ フィリピン歴史文化保護ナショナルトラスト ・ フィリピン ICOMOS 国内委員会 ・ フィリピン UNESCO 国内委員会 ・ 歴史保存協会 ・ フィリピン文化財保存科学協会（法人） ・ フィリピン博物館職員協会（法人） ・ フィリピン古文書研究家協会 ・ 私立図書館 その他、地方の文化グループ、歴史協会

5. 特に重要な記念物およびその保存状況

特に重要な記念物およびその保存状況についてのまとめを表-5に示す。アジア諸国には多くの文化的モニュメントが存在している(ここで挙げられていないものも多いが)ことが、アンケートの回答からもあらためて明らかになったものと思う。しかし、高温、多雨などアジア諸国の厳しい自然条件、管理の不行き届き、そして人為的な遺跡破壊などと相まって、保存状態のよくないうモニュメントも多いようである。

アジア諸国に存在する文化財のうち、特に世界的にも有名な文化財については、ボロブドゥルのように保存が概ね完了しているものや、現在進行中のものもある。しかし、保存・修復処置は一度実施すれば永久に有効であるという性質のものではなく、状態の継続的な監視が必要であり、いずれにしても保存が必要である。

保存の方法についてはあまり記述がなく、全体的な比較はできないが、伝統的な方法で行う場合、科学的な方法を応用する場合の両方が見られる。今後は保存処置後の経過についても情報を収集したい。タイのように、景観の修復も含めて保存が実施される場合もあったが、遺跡が作られた当時の景観に復元するのかどうか、また遺跡の観光への利用の問題とも関連して、各国の対応のしかたが注目される点ではないだろうか。

これらの文化財の保存に関わる国際協力についてふれている回答も寄せられている。中国の場合、敦煌莫高窟は東京国立文化財研究所との共同研究が現在行われており、その結果は保存作業に反映されると思われるが、それ以外にも保存の必要な石窟その他の文化財が数多く存在するようである。モルジブもインドの協力を得て保存を行っている。アンケートの回答に記述がなくても国際的な機関などの協力を得て保存・修復が行われている場合もあると思われる。しかし、保存が必要であるにもかかわらず、保存が行われていない文化財は甚だ多いことは明らかである。質、量とも豊富な文化財を有する多くのアジア諸国において、一国の力だけでは保存は不可能であり、国際的な協力が必要である。

表-5 重要な記念物とその保存状況

インド	<ul style="list-style-type: none"> ・最も重要な記念物（約5千）：インド考古調査局による保護 ・それに準ずる記念物（約1万）：各州の考古局による保護 <p>最重要の記念物は保存状態は概ね良好だが、よりいっそうの保護が必要</p>
インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・ボロブドゥル寺院〈中部ジャワ〉：ボロブドゥル保存事業実施、状態良好。現代の技術で修復 ・プランバナン寺院群〈ジョクジャカルタ〉：修復を要する建造物が多い ・セウ複合寺院〈中部ジャワ〉：ほとんどが廃墟、修復必要。最大の寺の一つは修復中 ・ゲドンソンゴ寺院複合〈中部ジャワ〉：保存が行われた分は状態良好 ・ディエン高原の寺院〈中部ジャワ〉：ほとんどが伝統的方法で修復 <p>この他、中部ジャワにムンドゥット、チャンディ・イジョ等、東部ジャワにパナタラン、シンガサリ、キダル、シャゴ等の寺院があり、北スマトラ、西スマトラ、西カリマンタン、南カリマンタン、西部ジャワ、中部ジャワ、ジョクジャカルタ、東部ジャワ、西ヌサ・テンガラ、モルカス等に古宮殿がある。バリ島には独特の寺院がある。</p>

韓国	武寧王陵：玄室の温湿度は調整され、ガラスの覆屋がある。保存状態は悪い	
カンボジア	・アンコールワット	：回廊等はインドによる修復実施
	・バヨン寺院	：修復中
	・バンテアイスレイ寺院	：“”
	・タプロン寺院	：“”
	・バンテアイクディ寺院	：“”
スリランカ	・シーギリヤ	：保存状態良好
	・アウカナ〈仏像〉	：“”
	・ポロンナルワ・ガル・ヴィハーラ	：“”
	・仏歯寺	：“”
	・ダンブッラ石窟寺院	：修復作業進行中
	・ミリサウェティヤ〈仏塔〉	：“”
	・ジェタヴァナ・ダゴバ〈仏塔〉	：“”
	・ティヴァンカ・ピリマゲ寺院	：状態悪い
	・マルキリガラ寺院	：状態良い
タイ	・ピマイ遺跡、プノンクン遺跡	：修復済み、景観も管理
	・ムアンタン遺跡、シカラブン遺跡	：新しい煉瓦に交換、景観修復
	・スラカムパンヤイ遺跡	：煉瓦交換、修復。景観も管理予定
	・ポンワン遺跡	：発掘中で、修復される予定
	・スコータイ遺跡	：修復が続行
	・パノンルン遺跡	：修復完了
	・ムアンタン遺跡〈石造の部分〉	：まもなく修復開始
	・パノムワン遺跡	：まもなく修復開始
	ほとんどの歴史的記念物が、生物劣化（主として樹木の生長による）と風化作用に侵されている	
中国	・敦煌莫高窟	：壁画の汚れ、変色、洞外の風砂による破壊
	・雲崗石窟	：岩体が脆く、石彫が劣化。大気汚染の影響もある
	・龍門石窟	：地下水、地表水の洞窟に対する影響が大
	・大同石窟	：地表水、大気汚染、生物劣化の影響大
	・孔雀山石刻	：花崗岩の風化
	・將軍山石刻	：下部で採鉱のため上部が割れて、沈み込んでいる
	・湖北大冶銅録山古鉱遺跡	：保護必要
	・陝西秦始皇陵	：文化財保護研究が実施されている
	・四川樂山大仏	：劣化、破壊され、研究対策中
ネパール	カトマンズの谷の7つの世界的な文化財	

ネパール (続き)	<ul style="list-style-type: none"> ・ハヌマン・ドカ宮殿広場 ・パタン・ドゥンバル宮殿広場 ・バクタプール・ドゥンバル宮殿広場 ・パスパティナト寺院地域 ・チエングナレヤン寺院地域 ・ボダナトストゥーパ ・シャンブナト地域 ・バクタプールの 55 の窓を持つ宮殿 ・解体、再建されたハリーシャンカル 	<p>この谷には、888 の重要な文化財がある。このほかにも多くの重要な文化財がある。はじめの 7 つの文化財や、ルンビニ、ティラウラコットは保存が行き届いているが、他の記念物の状態は必ずしも良くない。</p> <p>：早急に対処必要</p> <p>：早急に対応必要</p>
バングラデシュ	<ul style="list-style-type: none"> ・マハスタン・ガル <最初期の都市遺跡。都市プンドラナガラに比定> ・パハルプール <ヒマラヤ山脈南側では最大の単独の寺院> ・マイナマティ遺跡 <8~12世紀の様々な型式の仏教遺構> ・ヴァス寺院 <プンドラヴァルダラからほど近い仏教寺院> <p>この他、ムガール朝時代の多くの城砦やモスクが全土で発見される。</p> <p>ほとんどの歴史記念物の建材は煉瓦で、モンスーンの多雨のためすぐ崩れる。</p> <p>古い歴史記念物・ジャングルに覆われた塚の破壊（違法な煉瓦の採集、宝探し目的）が頻発。</p>	
フィリピン	<p>スペイン風の教会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンセバティアン教会 <極東初の総金属造りの教会> <p>国立歴史研究所(NHI)による保存事業実施。定期的整備は NHI と Recollect Fathers が実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サンアグスティン教会 <p>教会の関係者が建築の関係者の助言を得て管理、維持状態良好。フィリピンユネスコ国内委員会が管理。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミアガオ教会 <p>NHI による修復実施中。現在、屋根の修復が必要</p> <p>ルソン島北部、イロコス地方のいくつかの教会、バカラ、サンタ・マリア、パオアイ、サラット教会や、イサベラのトゥマワイニ教会は早急に修理要遺跡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イントラミュロスの壁 <スペイン統治時代の城砦都市> <p>壁の大部分が壊れており、修復、再建をイントラミュロス部が実施中</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タポン洞窟群 <4万年前の住居址> <p>当時に近い状態に保つため国立博物館が木の伐採や土の削剥を禁じている歴史的家屋</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アギナルドの聖地 <フィリピン独立を宣言した場所> ・リザールの聖地 <リザールの生誕、監禁、流刑の地> ・アゴンキロ歴史ランドマーク <フィリピンの国旗製作者の生誕地> <p>これらの保存は国立歴史研究所の建造物保存部が実施。ほとんどの建造物の状態は良好だが、全体的な修復が必要なものもある</p> <p>国のランドマーク</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プラスヴァイン教会 	

フィリピン (続き)	・ナグカルタンの地下墓地 この他の文化財は、政府の文化財法によって保護されている
マレーシア	・岩画〈グアタンルン、イポ、ペラク〉 ・モニュメント〈ブリヤン渓谷、ケダ〉 ・コタ・クララ・ケダ砦 ・ペンカラン・ケンパス巨石記念物 ・ポルトガル、オランダの建造物 ・木造宮殿〈クアラカンサン〉 その他多くの記念物がある
モルディブ	・マレ・フクル・ミスキイ〈マレ金曜モスク〉：インドとの協力で保存実施 ・マレ・エイド・ミスキイ〈マレエイドモスク〉 ・ボドウタクルファアヌ記念センター ・ウテエム宮殿 ・カルヴァカル・ミスキイ ・フェンフシ・フクル・ミスキイ〈フェンフシ島金曜モスク〉 ・ヴァアドゥウ・フクル・ミスキイ〈ヴァアドゥウ島の金曜モスク〉 その他の文化記念物も保存を行っているが、進行は遅い 保存にあたりインドの援助を得ることもある
ラオス	・ワットプー・チャンパサック：国の保存事業が進行中 ・ルアンプラバーン〈仏教寺院〉 ・Plain of Jars ・サムヌアの立石 : 保存は行われていない ・ルアンプラバーンの城壁 : 保存は行われていない

6. 保存技術者の研修方法

保存技術者の研修方法を表-6にまとめる。研修は、国内、国外両方で行われている場合が多く、国内では基礎的な研修、国外でより進んだ研修を受けるという方法をとっている。国内での研修は、研修のための数年～数ヶ月の期間の講座が研究所などに設けられている場合と、主に実際の業務の中で実地に経験を積むことで研修にかかる場合がある。インド、インドネシア、タイは研修講座の体制がある程度整っているよう、外国での研修を受ける際の受け入れ先としてもこれらの国の機関が挙げられている。〈3〉でも触れたように、大学で保存の講座を有する例は韓国などわずかで、この分野で大学の果たす役割は現在のところあまり大きくないといえる。

ラオス、ネパールのように研修はほとんど国外で行っている場合もある。ネパールの場合、基礎的な研修はインドで行っており、協力関係ができているものと思われる。外国での研修は重要なようだが、参加の条件をスカラーシップ、フェローシップなど経済的援助が得られる場合とする国が多く、思うように研修に参加できない場合もある。奨学金付きの研修講座が求められる。

国外での研修を受ける機関としては、インドの国立文化財保存研究所(NRLC)、French Institute、School of Archaeology、タイのSPAFA研修コース、日本の東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所、イタリアのICCROM、アメリカのポール・ゲティ財団などが挙げられている。東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所を挙げたのは第1回、第2回の各々1

カ国で、全ての研修機関を列挙していない可能性を考えあわせても、例えばNRLCやICCROMに比べて少ない。実際には東京国立文化財研究所などでは外国の保存従事者に対する研修が毎年何らかの形で行われているので、研修を受けたという印象が薄いのかもしれない。いずれにしても、後の項で述べられているように、日本のこの分野における貢献の余地は大きいといえるのではないだろうか。

表-6 保存技術者の研修方法

インド	<ul style="list-style-type: none"> ・国内の様々な機関に研修講座がある ・外国で研修を受ける専門家も多い
インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・国内に期間3年の理論、実務の研修がある UNESCOの援助による記念物、遺跡の保存、館蔵品の保存を主とする研修 外国での研修受講者による研修を、ジャカルタの中央訓練教育機関が実施、またボロブドゥル分析研究室に政府による研修コースがある 地方にも6～9ヶ月の研修講座があり国内外（東南アジア諸国）から参加 ・国外では国立文化財保存研究所（NRLC）〈インド・ラクノウ〉、BRGM（フランス）、ICCROM（イタリア）、東京国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所〈日本〉、ベネチア〈イタリア〉、オランダ、バンコク等がある
韓国	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家のための公の（機関による）講座はなく、木浦大学校考古学科、韓国観光大学に保存科学のカリキュラムがある ・国立文化財研究所、博物館及びそれに類する機関で研修を受講
スリランカ	外国の大学、国際機関での研修
タイ	<ul style="list-style-type: none"> ・国内では、ナコンラーチャシマー州のプラサトポンワンで研修講座を実施 ・国外ではICCROM（イタリア）、ゲティ保存研究所、ロンドン大学、NRLC（インド）、東京国立文化財研究所、フランス、ベルギー等がある UNESCOや、UNDPからフェローシップを得ている
中国	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の大学に文物保護の学級があり、文化財保護に従事する人材を養成 ・大学を卒業、各研究所への配属後、研修を受け、日常業務の経験から訓練 ・中国保存協会が特別セミナーを実施 ・一部は外国で研修を受けたり、外国を視察して研修
ネパール	<ul style="list-style-type: none"> ・考古、芸術史 : School of Archaeology（インド・ニューデリー） ・建築、土木、工芸、監督 : French Institute（インド・ポンディシェリー）〔研修のための短期（最長6ヶ月）のスカラーシップを希望〕 ・化学 : NRLC <p>高度な研修はICCROMなど（奨学金がある場合） 奨学金をUNESCOや、友好国から受ける</p>
バングラデシュ	<ul style="list-style-type: none"> ・化学、保存の専門家は基礎はインド、高度な研修をヨーロッパで受ける ・ワークショップ・プログラムに保存研究の専門家を招く場合もある ・国立博物館の保存部による実務および理論の研修が開始された

フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・政府、私立の機関で実際の経験を積む ・文化財の保存に関する国内のセミナー、シンポジウム、会議に参加 ・外国での研修、セミナーに補助金を受けてまたは招かれて参加する ・オーストラリア、ハワイ、イタリア、中国の研究所が行う見学旅行に参加 ・保存技術に関する図書の購読、各種学会の会員でいることで、保存、修復技術者が最新の保存技術の情報を得る ・国立歴史研究所で以下のような分野の技術研修を実施している 有機物保存研究法、金属の保存、博物館収蔵品の予防的保存、青銅の保存、紙の保存、石の保存、壁画の保存、写真の保存、図書・古文書の保存、木造建築、木製品の保存
マレーシア	<p>様々な機関で研修を受ける</p> <p>キャンベラ大学（オーストラリア）、NRLC、SPAFA 研修コース（タイ・バンコク）、ポール・ゲティ財団（アメリカ・カリフォルニア）、ICCROM、ヨーク（イギリス）</p>
モルジブ	研究所の基礎訓練を受けた博物館管理者、紙の保存の専門家はインドで研修、他の研修の機会を探している
ラオス	国内での研修は不可能で、外国でのみ研修

7. アジアセミナーについての印象、意見、アドバイス、要望

アジアの文化財の保存の現状という小論のテーマからは若干ずれるが、アジア文化財保存セミナーについての感想、要望を列挙する（表-7）。セミナーに関するコメントとはいえ、アジアの文化財保存の専門家が何を求めているのか、今後アジアの文化財の保存のために何が必要であるかが述べられていると考えたためである。セミナーの運営に関する感想については省いた。

アジアセミナーが大変有意義であることは、全ての参加国が認めるところであった。

セミナーは、各国の文化財保護の状況や、最新の情報、文化財保護の経験を知るという情報収集の場として利用され、また知り合いを増やして将来の学問的な交流を続ける基礎を作る場、協力・援助関係を結ぶ機会を作る場となっていた。アジアの保存の専門家にとって、アジア諸国の保存の専門家が一堂に会するセミナーは、人脈作りの場を提供する点についてだけでも、重要な意味を持つものであろう。セミナーの効用がそれに留まらないことは勿論だが。また、第2回の回答で、保存の専門家の地位や発言力の強化につながるものだとする意見が出ている。保存の国際的なセミナーが意外な役割を果たしているようだ。

第1回目の回答では、定期的な開催を望む意見がいくつか出されている。現在、セミナーは毎年開催されており、その声に結果的に応えたものになっている。

セミナーのテーマについての意見では、第1回セミナーのテーマについて、テーマの幅は広すぎるとして、より限定的なものを望む意見が出ている。また、毎回異なったテーマ、現在直面している問題をとりあげることを望む意見があるが、この点についても要望に結果的に応じている。さらに、科学的、技術的な面の討論を望む意見がある。

開催場所について、毎回開催場所を変えてはどうか、という意見も出されている。実現するためには、日本が専門家を招へいするという現行の開催形態の枠にとどまることはできないと思われるが、ある国に特有の問題の解決に有効な手段もあり、今後の重要な検討課題である。

エクスカーションについては、東京国立文化財研究所などの研究機関や、日本の重要な史跡の見学が有意義だったという意見がある反面、セミナーのテーマと関連した場所の見学を希望する意見もある。保存科学の機材や、先端機器の使い方の実演を行う日を希望する意見もあった。現在、保存関連の施設、史跡の見学は数日に分けて行われているが、前者については東京国立文化財研究所、京都国立博物館国宝修理所、奈良国立文化財研究所とし、後者は奈良の数カ所の古寺としている。

このほか、セミナーの成果を出版してほしいという意見、保存に関する情報誌の発行を望む声、保存技術改善のための共同プログラムを作るべきだという意見がある。これには、セミナーに関する活動をセミナー開催そのものにとどめず、常時機能するものにしなければならない。いずれの実現についても、常設の機関が必要である。この点は「アジア文化財保存センター」を設置すべきである、という意見に集約されるのではないか。以下の項とあわせて、日本に対する期待が述べられているものと考えたい。

表-7 アジアセミナーについての要望等

【第1回セミナー】

インド	<ul style="list-style-type: none"> ・セミナーの成果の出版を望む ・定期的（2、3年毎）に、より限定されたテーマで開催されるとよい
インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・友情を広げ、知識を分け合うよい機会だった ・最低2年に1回の開催を希望 ・石材保存技術に関するセミナーを対象をアジアに限定せず実施してほしい ・保存技術の改良のため、保存についての共同研究プログラムを作るべき
韓国	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の発表者が発表で取り上げた文化財を見学できれば有益であろう ・セミナーのテーマを限定した方がより深く、活発な議論となっただろう
スリランカ	<ul style="list-style-type: none"> ・石材に関する知識を深めた ・経験を交換し合い、問題点を明らかにできた ・セミナーをもっと頻繁に、アジアの他の国を会場にして開催するとよい。 ・保存の最新の進歩に関する定期的な情報誌、或いは紀要の発行を希望
タイ	<ul style="list-style-type: none"> ・（エクスカーションで）訪れる史跡や、記念物についての講義はセミナーの題目に関連したものであるべき ・セミナーの題目にあった史跡の訪問を日程の中間にはさんでほしい
中国	<ul style="list-style-type: none"> ・アジア文化財保存センターを作るべきだ。現状では日本設置が適当 《センターの任務》 ・アジア諸国の文化財保護技術の交流、文化財保護技術の情報センター ・アジア諸国の文化財保護技術者の養成 ・アジア諸国の文化財保護の現場の相互視察 ・文化財保護の研究、その成果に関する会議の開催 ・アジアの国文化財保護に対する技術支援およびプロジェクトへの参加
ネパール	<ul style="list-style-type: none"> ・知識と経験の交流の場として有用 ・アジアの文化財が直面している問題について毎年異なる主題で開催を希望

フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な国の文化財について話し合い、視点を共有できた ・各国の文化財保護の状況を知ることにより、保存の分野で視点、ノウハウ、経験を分かち合い、相互に助け合い、関係が緊密となった ・今後もこの様なセミナーが開催されることを希望する
マレーシア	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的にセミナーを開くべきである ・東京国立文化財研究所の先端科学機器や、重要な史跡の見学はよい経験 ・研究者同士が知り合い、学問的な交流を続けるよい機会となった ・他国と比べた自国の文化財保存の状況を正しく理解できた
ラオス	<ul style="list-style-type: none"> ・文化財の管理に関する行政的、科学的な面について多くのことを学んだ ・保存科学についての日本の経験の蓄積は驚くべきものだと感じた

【第2回セミナー】

インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・このプログラムはわが国にとって重要である ・保存活動についての知識と経験を得られた ・セミナーにより、文化財の保護、保存に関する勉強が必要だと感じた ・第2回セミナーでは、日本からの保存科学の専門家の講演もほしかった
タイ	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な地域の専門家と意見を交換できた ・保存の専門家の協力関係、発言力、地位を向上する手段となり得るだろう
中国	<ul style="list-style-type: none"> ・セミナーでは情報の交換、相互援助が可能 ・保存に関する普遍的な重要問題について話し合うことが必要
ネパール	<ul style="list-style-type: none"> ・(保存に関する)問題とその解決方法について多くを知る絶好の機会 ・日本の研究所を見学して、アジアの文化財に対して自分なりの方法で貢献できるのではないかという考えに変わった ・セミナーに付随したワークショップの実施は博物館員にとってより有益
バングラデシュ	<ul style="list-style-type: none"> ・意見を交換し、経験を知ることができた ・将来はもっと科学的な面、技術的な面の討論があるとよい ・保存科学の機材や、先端的な機器の実演を行う日があるとよい ・科学技術、伝統技術とも有する日本が、文化財保存の分野でアジアの国々をリードしていくべきだ
フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアセミナーは、保存の必要性と、アジア諸国の保存事業について理解を共有するすばらしい手段であった ・日本のような国からの援助が必要である保存の分野において、アジアの国々からの参加者に、知識の十分な点、不十分な点を印象づけた ・アジア諸国での保存の必要性について知ることができた ・視野を広げ、文化財の科学的保存に関する知識を深めた有意義な経験
モルジブ	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な国からの出席者と考えを共有する機会となった ・いろいろな国が直面している問題、困難、それに対する見通しを知った ・参加国との間で将来の協力、援助関係を結ぶ機会となった

モルジブ (続き)	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館や修理工房の訪問はよい経験となった ・今後のセミナーには2名出席できるようになればより有益だろう ・セミナーに付随したワークショップ実施のため、日程の延長を希望
--------------	--

【第3回セミナー】

中国	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの国で先端的な技術が文化遺産の保存に用いられていることを知った
フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・開催国を持ち回りにすることが有益 ・保存従事者が情報や行動の指針を得るためのニュースレターが必要

8. 文化財保護に対して果たすべきあるいは果たし得る日本の貢献

以上のような日本に対する要請（表-8）を内容ごとに大別すると、資金、研究施設、機材等の財政面での援助、専門家の派遣、技術の提供、日本あるいは現地での研修の実施といった技術的な援助（人材養成に関する援助）、そして文化財保存のための共同プロジェクトや、共同研究など共同事業の実施が挙げられている。いずれの面においても、日本に対する期待には大きいものがある。

従来の援助は財政的な面が中心であった。しかし実際には、贈られた高価な分析機器が操作する技師がいなかったり、技術者を養成しても直ちに他の業種に転職してしまうなど、使いこなされることなく死蔵される例もあり、適切さを欠く面がなかったとはいえないのではないか。援助の対象となる国にとって必要なものは何であるか、きめ細かな実状の分析に基づいた内容の援助が必要であり、貢献度の大きさは援助額だけで量ることはできない。文化財が存在する国が主体的にその文化財の保存を行っていくことができるような援助が重要である。日本からの文化財保存の専門家の派遣や、各国の専門家に対する研修事業といった人材育成、情報提供、セミナー、ワークショップの開催など、ソフト面での援助を各国が期待していることがアンケートの回答からもわかるだろう。この点を現在以上に重視する必要があると思われる。

さらに、共同研究を希望している国が多い。共同研究に対するアジア諸国の考え方は一定ではないが、対等な協力関係の形成を希望することの表現としての面を意識する必要があろう。

表-8 日本に対する要請

【第1回セミナー】

インド	<ul style="list-style-type: none"> ・国立文化財保存研究所ではいくつか研究を行っており、共同研究が可能 ・科学者や保存の専門家が、文化財保存に関するインド・日本ワークショップを、毎年インドと日本で交互に開催することが可能
インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・保存のための設備についての技術的援助、研修についての財政面での援助 ・科学機器の援助 ・研修時のフィールドでの保存研究者の派遣、教授用の機材の援助 ・洞窟壁画の保存、有機物（特に木製品）の保存に関する研修の援助
韓国	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家への教育、研修講座の実施 ・二国間、あるいはそれ以上の共同研究プロジェクト ・図書や情報の交換

スリランカ	<ul style="list-style-type: none"> ・中程度の技術者および専門家の養成 ・保存従事者のためのワークショップ、セミナーの開催 ・保存従事者のための外国への巡検 ・保存研究所への設備の供給、先端的な保存研究所の設立、化学薬品の供給 ・重要な遺跡の保存への協力
タイ	<ul style="list-style-type: none"> ・文化財修復の方法、技術の提供 ・文化財修復のための設備、機器の供与
中国	<ul style="list-style-type: none"> ・文化財の研究、保護の共同プログラムの実施 ・先端的な技術、設備、機器の提供 ・文化財保護の技術に関する日本での研修
ネパール	<ul style="list-style-type: none"> ・資金、資材、専門家育成のための文化財団の設立
フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・日本とフィリピンとの共同プログラムでの専門技術の供給 ・日本で行われる文化財保存についてのセミナー、研修講座、シンポジウムへのフィリピンの専門家の招待 ・文化財保存事業の強化のための財政的援助
マレーシア	<ul style="list-style-type: none"> ・適切な保存研究所のための設備、機器の援助 ・東京国立文化財研究所で研修を行う際のスカラーシップ ・日本とマレーシアが共同研究を行うための研究財團 ・地元での、保存に関するジャーナルあるいはニュースレター発行機関設立
ラオス	<ul style="list-style-type: none"> ・財政的、科学的専門技能の援助

【第2回セミナー】

インドネシア	<ul style="list-style-type: none"> ・有機物の保存・修復の研究設備の供与、保存研究室の先端的な設備の援助
タイ	<ul style="list-style-type: none"> ・専門家、技術、機材および財政的援助、職員の研修 ・アジア・太平洋諸国を対象とした特定のテーマに関するセミナーの開催
中国	<ul style="list-style-type: none"> ・中国人の保存専門家の育成への協力
ネパール	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館収蔵品や、宗教、文化、社会的活動の記録のための写真機材の提供 ・展示、保管施設や照明システムに関する指針作りのための専門家の派遣 ・巻物の表装、木製品の修復への協力
バングラデシュ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人の専門家がバングラデシュを訪れ、問題を理解してほしい ・国立博物館保存研究室と東京国立文化財研究所との協力関係を推進するために、東京国立文化財研究所、あるいは他の研究所を訪れたい ・保存のための特殊な材料の供給、日本における研究に関する出版物の提供
フィリピン	<ul style="list-style-type: none"> ・技術的援助に関する情報交換、セミナー、ワークショップへの参加 ・保存技術研究に関するコンサルタント
モルジブ	<ul style="list-style-type: none"> ・人材養成への援助、保存研究所設立、強化への援助 ・歴史的記念物、資料の保存についての専門知識、技術の提供

【第3回セミナー】

韓国	・両国間の定期的な文化財保存に関するセミナー ・両国間の関係学会の交流のための支援
フィリピン	・アジア諸国で活動する多国籍企業に、利益の僅かの部分を文化財の保存に 関わる機関に寄付することが、文化財の保存・修復に大いに役立つことを 理解させてほしい

おわりに

自然環境、政治・経済的状況から鑑みて、アジアの文化財が置かれている状況は厳しいものがある。しかし、アジア諸国はそれぞれ独自に、あるいは国際的な協力関係のもとに文化財の保存、修復に向けて努力してきた。このアンケートによって、アジア諸国における文化財保存に関する現状、文化財保存における日本の貢献に対する期待の内容がかなり明白となった。とりわけ、経済大国としての財政的な援助に対する期待だけではなく、日本を文化財保存に関する科学を応用した先端技術と、優れた伝統技術を有する国として評価し、技術援助、人材育成に対する援助を期待する諸国が多いのが印象的であった。報文末の質問項目に見るように、このアンケートは記述の自由度が高く、その結果回答の形式の不一致を招き、詳細さも不揃いとなってしまった。今後は、回答例を付加するなど形式の均一化をはかり、アジア諸国の文化財保存の現状に関するデータベースとして活用できるよう改善につとめたい。また、本アンケート調査は国際的なものであり、調査結果の英語版も作成したいと考えている。

INQUIRY PAPER

Name: _____ Sex: _____

Date of birth: _____

Nationality: _____

Organization and present position: _____

Mailing address:

- 1 . Please explain your specialities and duties:

- 2 . Please explain the system, staffs and works of the organization which you work for:

- 3 . Please list national organizations which deal with the conservation of cultural heritage in your country:

- 4 . Please list organizations other than national ones which deal with the conservation of cultural heritage in your country (international or private institutions, etc.) :

- 5 . Please list specially important cultural monuments in your country, and explain the situation of their conservation:

- 6 . Please explain how specialists for conservation in your country are trained:

- 7 . Please express your impressions, opinions, advice and requests to the Seminar on the Conservation of Asian Cultural Heritage:

- 8 . In order to conserve cultural heritage in your country, what kind of contributions do you think Japan should/can make?

- 9 . Any other comments:

The Present Situation of the Conservation in Asian Countries
-Results and Analysis of a Questionnaire-

Tadateru NISHIURA and Yoko FUTAGAMI*

Tokyo National Research Institute of Cultural Properties and the Agency of Cultural Affairs hold a seminar on the conservation of Asian cultural heritage every year from 1990. Inquiries about the activities for the conservation in the countries of the participants were made each time. The authors report the results.